観察 Observation

モンゴルでの展示

野生動物学研究室教授　高槻成紀

モンゴル国立自然史博物館で「モンゴルの野生動物：日本モンゴル共同調査隊の見いだしたもの」という展示をおこなうことになった。7月のはじめに開会式があり、日本大使やモンゴル自然史博物館長、東京大学総合研究博物館長の林先生などのあいさつがあったあとで、私にもひとこといえという指名があった。私はおよそ次のようなことを言った。

＊

私が子供のころ、モンゴルというのはほんとうに想像の上でしかない遙かな夢の国でした。広い草原にヒツジがいて、白いテントのような家に人がすんでいて、のんびり移動しながらくらしているらしい。そんな牧歌的なイメージでした。時代は米ソの冷戦時代で、東側の情報は限られていました。

生態学を学ぶようになり、草食獣と植物群落の関係を勉強するうちに、モンゴルが違う意味の夢となりました。でも、もちろん自分が行けるはずもなく、ただあこがれるだけの国でした。

ところがソ連が崩壊し、世界の構図が変わりました。モンゴルに行ってきたという人の話も聞くようになりました。

「もしかしたら自分も行けるかもしれない」

夢が現実になるかもしれない時代が予想もしないかたちで訪れました。

東北大学から東京大学に移ったときに、中国のハルピンから留学生が来ることになりました。ハルピンというのは私の父が鉄道員として青春を過ごした街として、子供の頃から聞いていました。ロシア風のすばらしい街だったそうです。私は放牧に興味があったので、民間財団に調査の申請をし、留学生と内蒙古草原を訪れました。そのときに一瞬ですが、モウコガゼルの姿を見たのです。その留学生は大学院の修士研究でモウコガゼルを調べたという話をしてくれました。私はアジアにこんな草食獣がいることを知って感激し、夕日を見ながら「このガゼルがたくさんいるというモンゴルに行きたい」と思いました。こうしてモンゴルが現実味を帯びた夢となりました。

数年してその夢はまさゆめとなりました。東大農学部のチームでモウコガゼルの季節移動を追跡する研究がはじまったのです。はじめてゴビに行き、苦心のすえガゼルを捕獲し、移動経路が解明できたときの感激は今でもありありと覚えています。調査はいつもモンゴルの研究者と地元の牧民の人にお世話になりました。

そうした調査を毎年つづけ、毎年夏にはモンゴルに行くのが恒例になりました。研究成果もあがり、論文も書きました。国際学会でシンポジウムを開いたりもしました。そうした経験をするうちに、「先進国の研究者がデータをとって学会に論文を書いているだけでいいのだろうか」という気持ちが湧いてきました。こういう成果はモンゴルの人にこそ知ってもらうべきだと思います。それで、私はモンゴルの博物館で展示をすることを考えたのです。新たな夢です。

当時の職場である東京大学総合研究博物館はアジアの博物館と共同活動をする動きを持っていました。それで私はモンゴルのこのアイデアを提案しました。これもうまく採択されました。こうして、いま我々の

成果をモンゴルの市民の紹介し、ご恩返しをすることができたような気持ちがしています。

思えば夢は実現するもの、実現したことが、また次の夢を破婚でくるものです。そして、私は今また新しい夢を持っています。それはウランバートルの立派な博物館ではなく、モンゴルのいなかの小さな小学校のようなところで、展示をするということです。今回のような大がかりな展示にはなりませんが、自動車に展示キットを積んで、ゴビ砂漠やアルハンガイなどにでかけ、子供たちにモンゴルの自然のすばらしさを知ってもらうというアイデアです。私にはモンゴルの子供たちが、目をキラキラさせながら標本やスライドも見ている姿がはっきりと目に浮かびます。こうした小さな「驚きの出会い」をモンゴル中でおこないたいのです。

これまでの夢も、はじめはとても実現するとは思えないものばかりでした。それでも希望をすてないで求め続ければ、ひょっとしたことから実現に展開することがあるものです。

*

あいさつを終えて、展示の解説をしたあと、質問を受けた。アメリカの動物生態学研究者の女性が「あなたの夢の話、とてもよかったわ」と言って、ウィンクした。

++++++

間を過ぎれば乗客はまばらだ。新しい乗客はすぐにわかる。ふと隣を見るとさっきまで明るかった彼の様子がおかしい。明らかに警戒している。というより怯えているといった方が正しいかもしれない。今乗ってきた男が気になるらしい。その男が降りていったあと彼は「あのヒト怖かった」と私に言ってきた。男は眼鏡をかけた細身の、どこにでもいそうなタイプの人間だったので、私には彼の怖がる理由が思いつかなかった。私の態度を察したのか「最近あったデショ、東京の方で。ああいうヒト」と付け加えてきた。どうやら先日秋葉原で起きた連続殺傷事件のことらしい。ワイドショーなどで報道されていたのでなんとなく容疑者の顔が浮かぶ。その顔には眼鏡がかかっていた。彼なりに観察した結果なのだろうか、彼の中で眼鏡の男は恐怖の象徴として映っているように思えた。みんながみんなそうじゃないのだから気にしすぎだ、と言うと彼は「本当にそう言えマスか？言えないデショ？」と笑顔のまま返してきた。確かにその通りだが…安心させるつもりが逆に不安を煽られてしまった。

その後は特に話すこともなく電車は進み、彼の言っていた駅に着く。彼は立ち上がり私にもう一度「ありがとね」と言い残して降りていった。結局、缶ビールのフタが開くことはなかった。

このエッセイを書くにあたり、「観察」という言葉を調べてみた。『物事の様相をありのままにくわしく見極め、そこにある種々の事情を知ること』（大辞林）。なるほど。しかし少々簡潔すぎる。そこで若干信憑性には欠けるがウィキペディアの出番である。それによると『観察という行為には人間の「認識」というプロセスが含まれていて、観察者が誰であろうが（科学者であろうが）、認識は心理あるいは脳神経的なプロセスであり、そこには「先入観」および「主観と客観」といった問題が潜んでいる』のだそうだ。

眼鏡をかけた細身の男性。この人物に対する私の出した観察結果は「おとなしそう」であったが、恐らく彼の出した結果は「何をするかわからない」であったのだろう。そしてこれらを決定したのは「経験（私）」と「報道（彼）」に基づく「先入観」だと思われる。

「認識」のズレが引き起こした観察結果のズレ。これは今後の研究でもそのまま起こりうることだと思う。先入観で突っ走って失敗。私のよくやるパターンである。たまたまの出会いであったが、このことを機に先入観に囚われないよう努めていきたい。

++

オブザベーション・観察

動物応用 3 年　鈴木大志

僕は自分のテーマについて少し書いて見たいと思います。僕の研究は簡単に言えば「八ヶ岳のフクロウの雛が、生まれてから育つまでに何をどれだけ食べていたのかを調べる」というものです。フクロウは食べたものの骨や毛皮など消化できないものを吐き出すという習性があり、その未消化物をフクロウの巣の中から集めることで、何匹食べたか、何を食べたかを調べることができ、八ヶ岳のフクロウでこれを調べるというのが僕の研究のテーマです。

まず研究の材料、フクロウの巣箱の巣材は八ヶ岳の清泉寮という施設でフクロウの観察や巣箱作りなどされている「フクロウ学校」の皆さんに提供していただきました。皆さんフクロウが大好きで、フクロウの知識とフクロウに対する情熱は、すごいものでした。フクロウ学校での雛が巣立った後の巣箱の観察に同行させていただき、巣材を回収するときに、回収した巣材を一度広げて観察をしました。自分はもちろん、フクロウ学校の方々も巣材の中身の観察は初

めてということで、興味津々のようでした。自分たちの大好きなフクロウが、とても可愛いヤマネを食べているというのに少し複雑そうだったのが印象深いです。可愛いから動物好きというだけでは野生動物の調査はやっていけないということが実感できました。

さて、いただいてきた巣材の中の未消化物を探してみると、ネズミやヤマネなどのげっ歯類、モグラなどのトガリネズミ類、カケスなどの小鳥をはじめ、コウモリや昆虫の翅などが出てきました。

出てくる骨は多種多様です。骨をみていると本当によく工夫されていると思います。例えば硬い木の実を齧るネズミの顎はミミズなどを食べるモグラによりもはるかに大きく、力強いものです。また、鳥類の骨は地上を這うネズミやモグラに比べ密度が低いのかとても軽くなっています。目的の違いで骨がこうも変わるものかと、驚かされました。またその変化は本当に小さな骨、直径が 1mm にも及ばないような骨においても徹底されているということに、ある種の感動を覚えました。動物それぞれの環境に対する進化は外面的なものや独特の行動など目立つものばかりではなく、その内側での変化も大切なものなんだなと思いました。

これから僕は回収した骨が何の動物なのかを同定していく作業に入ります。その過程でも、新しく知ることや気が付くことがたくさんあると思います。研究をできる期間というのは本当に短いものなので、その発見、驚き、感動などをつぶさに観察していけたらよいと考えています。

++++++

いものに感じた。名前を考えながら歩くと、植物はただの緑ではなくなった。細かく見るからなのだろう、１つ１つの輪郭がはっきりする。人間が名前を呼ばれるとふりかえるように名前を考えていると植物もこちらを向いてくれるように思えてうれしくなった。

目や耳や肌で感じたものは生き生きしている。私はその感触が好きだ。私は植物のことがそうして好きになったのだと思う。

八ヶ岳での観察で、私は少し違う感じ方の勉強ができた気がする。みつけようとして見る。これは前向きな感じ方だと私は思う。何か見つけたいと思って歩いていると私の感覚は普段よりももっと敏感になる。「考える」が「感じる」を生み、感じるから考える。

これからいろんなものに出会いたい、たくさんのことを感じたいという気持ちでいっぱいだ。

シロバナエンレイソウ

チゴユリ

キスゲの仲間

++++++